

2014 年 10 月 23 日

## 在日ブラジル人の事例から考える移民政策と多文化共生政策

話題提供者：アンジェロ・イシ (Angelo Ishi)  
武蔵大学社会学部教授

### はじめに

- まずは 2009 年 5 月にテレビ朝日系列で放送された番組『たけしの TV タックル』の一部をご視聴いただきたい。
- ご覧いただくのは番組の冒頭部分 (解説の VTR とスタジオ出演者の顔ぶれに注目)、そして日系人の「帰国支援事業」に関する解説 VTR とスタジオ討論の部分 (この事業は本日の主題の一つであり、後ほど詳しく説明する)。

### 「移民政策」と「多文化共生」 ～ 「日系人」から考える

- 自己紹介を兼ねて：「日系ブラジル人 3 世」から「在日ブラジル人一世」へ
- 移民政策の歴史は移民「無策」の歴史？
- 80 年代のバブル時代。製造業の人手不足を補ったのは中東などからの「不法滞在者」と、日本国籍を有した南米からの「日系一世」の U ターン組。
- 1990 年の出入国管理および難民認定法の改正で「日系人」に対して特別の在留資格が付与されるようになったおかげで、「デカセギ」がブームに。しかし、政府としては「移民」を迎えたのではなく、「親族訪問」や「墓参り」などを主目的として日系人に「活動制限のない在留資格」を与えたという建前。
- 2005 年：総務省が「多文化共生の推進」に関する指針を策定、2006 年に発表 (ぼくも当時の委員の一人)。よくも悪くも「多文化共生施策」ブームが始まる。
- 2000 年代後半：日本版 US-VISIT 導入での「再入国」組への冷たさから、「日系人」への愛想が尽きたと分析する。空港の入管では特別永住者だけ指紋採取と写真撮影を免除され、「一般永住」と「日系人」は毎回、「テロリスト予備軍」や「不法滞在予備軍」と同じ扱いを受けているのだから。
- 同じ 2000 年代後半には「移民 1000 万人受け入れ計画」が浮上。「たけしのテレビ・タックル」というバラエティ番組が「移民受け入れ問題」を取り上げるほど、「移民問題」がごく一時的に注目を浴びた。
- 同番組のテーマは「在日外国人決起」だったが、出演依頼が来たのは韓国人、中国人、日系ブラジル人。金髪の欧米人や、いかにも外国人の黒人ではなく、この 3 人が「外国人」代表として出演した点に注目。さて、なぜ、この三つの国の人だと思いますか？

→ 2014年現在は日系人を中心とした約20万人のブラジル人が日本で生きている。外国人登録者を国籍別に見ると、ブラジルは中国籍や韓国・朝鮮籍、そしてフィリピンに続いてトップ4に入っている。

→ 不況、派遣切り、日系ブラジル人解雇、帰国支援事業：「情」が抜けた政策は支持されない。欧米メディアはみなさんの想像以上に目を光らせて日本をマークしている。帰国支援事業もニューヨークタイムズやタイム誌が日本政府を酷評したのが響いたと思われる。

→ 実は在日ブラジル人の「世論」は分裂しており、ぼくもバッシングの対象になった。その背景には、「日本政府がいちばんいろいろサポートしてくれている」という声と、「変に生意気に主張を強めると、もっとこの国から締め出される逆効果を生むだろう」という懸念があるようだ。

→ 番組内での自民党議員の発言：あらためて「日系人の受け入れは失敗だった」と。そして、「日本語能力重視のビザ発給審査」を強調。

→ 移民1000万人受け入れは本当に多いのか：すでに日本代表のサッカーチームが同じ！

→ 私が『外交』に書いた記事から抜粋：

「.....セルジオ越後さんや、Jリーグの創世においてフィールドの内外で決定的な偉業を成し遂げたジーコの名前を出すまでもなく、ブラジル人の日本サッカー界への貢献度は計り知れない。その日本代表がブラジル大会への出場権をいち早く手に入れ、大会直前のキャンプ地にサンパウロ州イトゥー市の施設を選んだと聞いて、私は興奮した。というのも、イトゥーは私の母方の家族が長く住んだ町であり、私の母親が嫁ぐまで少女時代を過ごした心の故郷だからだ。イトゥーの祖父母の実家に3世代の親族100人が結集したクリスマスパーティーで従兄弟たちと遊び疲れた日々は私の少年時代の大切な思い出だ。

私はこれまで各省庁が設立した移民政策関連の委員会で提言の機会を与えていただいた際には、好んでサッカーの例え話を盛り込んできた。たとえば移民を1000万人受け入れる計画案が数年前に浮上した際、多方面から反対や心配の声が挙った。多くの人はそれでは日本人が守ってきた「古き良き文化」が脅かされ、地域社会における「安心・安全のまちづくり」が崩壊するのではないかという、漠然とした恐怖感にかられたようだ。

そういう人たちには、この十数年の日本のサッカー代表チームを思い返してもらいたい。まずはラモス瑠偉というリオデジャネイロ出身のブラジル系日本人が、「純日本人」以上に日の丸を背負って「ドーハの悲劇」で汗と涙を流した。次いでサンパウロ出身の呂比須ワグナーがフランス大会で、ワールドカップでの日本代表の歴史的初ゴールをアシストした。続く2002年の日韓大会と2006年のドイツ大会では三都主アレサンドロ、2010年のアフリカ大会では（そしてアテネオリンピックでも）日系ブラジル人の帰化選手、田中マルクス闘利王が「サムライ・ブルー」として闘った。

ラモス、呂比須、三都主、闘利王。次々と「帰化外国人」がチームに入ることによって、

日本代表の「和」は果たして損なわれたのだろうか。むしろ、この「異分子」が加わることによって、魅力と総合力が増したと言えまいか。フィールドに立つ11人のうちの1人がブラジル出身というのは、ちょうど日本人口の1億2千万人のうち1000万人が外国人になる場合の比率（11分の1）とほぼ一致する。「黒船」や異文化に脅える必要などないのだ。」（アンジェロ・イシ、「"伯流"というゴールに向けて ～ パスをつなぐのは在日ブラジル人」、『外交』vol. 25）

→ 帰国支援事業についてはスライドで詳しく説明。

### 無策のツケが顕在化する事例

→ 浜松市の「宝石店立ち入り禁止事件」で「人種差別裁判」（Ana Bortz 事件）。「法の壁」よりも「心の壁」崩しを訴えるのがブラジル流？

→ 浦和レッズ「JAPANESE ONLY」事件の衝撃。Jリーグはなぜ、FIFA に習って「NO TO RACISM」キャンペーンを実施して来なかったのか？（ぼくは数年前から、各方面に対して、大々的な「差別にノー」というキャンペーンを提唱してきた）。

### 各論：多言語情報の提供をめぐる

→ 情報提供を必要としているのは在住外国人だけではなく、「日本人」住民にも「外国人」住民に関する情報をもっと提供する必要がある。

→ 在日外国人に関する知識が不足するという意味において、「日本人住民」も「情報弱者」になっていると言える。メディアにも行政にも課題が残されている。「地域住民の意識啓発」は依然として重要。

→ マスメディアや「国」に期待できる部分には限界があり、外国人同士あるいは外国人発の情報発信やコミュニケーション能力にも限界がある。となれば、各地域・自治体のみなさんがローカルレベルでもっと頑張るしかない...？

→ エスニックメディアの活用に過度な期待を込めることはもはやできず、地域行政による情報発信がより一層、重要性を増している。ニュースレターやポータルサイトもコンテンツのみならず、デザイン等を外国人住民にとってより魅力的な形に衣替えしてみては。

### おわりに

→ 明るい話題に結びつけられる「グローバル人材」、暗い話題に結びつけられる「多文化共生」。歓迎すべき人々として語られる「グローバル人材」、歓迎して良いのかと疑問符を投げかけられる「外国人労働者」や「移民」。

→ 安倍首相の最新の所信表明演説から読み解く政府の「本音」：「外国人」と「グローバル人材」という言葉が使用されているが...

#### セミナーで配布の参考資料の説明：二つの提言集

→ 2010年2月20日に行なわれた「外務省, 神奈川県, 国際移住機関(IOM)主催 「外国人の受入れと社会統合のための国際ワークショップ」 テーマ1分科会(分科会コーディネーター アンジェロ・イシ) の成果物である、「外国人を受け入れる地域社会の意識啓発に関する提言」の全文は下記のリンクからダウンロードできます。

[http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/local/database/pdfs/foreign\\_teigen.pdf](http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/local/database/pdfs/foreign_teigen.pdf)

→ 内閣府が民主党政権時の内閣官房主導（中川正春特命大臣）で開かれた「外国人との共生社会」実現検討会議の第4回ヒアリング（平成24年7月3日開催）で私が提出した資料をそのままプリントした。詳しくは下記のリンクをご参照：

<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyousei/dai4/sidai.html>

以上